

心身症の児童生徒に対する実態把握と支援・指導の実際

1 学校概要

(1) 学校沿革

本校は、平成28年4月に企救特別支援学校（病弱特別支援学校）と門司特別支援学校（病弱特別支援学校）、小倉南特別支援学校（知的障害特別支援学校）の3校が再編され、知的障害教育部門と病弱教育部門（心身症）の複数教育部門を設置する総合特別支援学校として開校し、今年度で6年目を迎える学校である。知的障害教育部門には小学部、中学部、高等部の児童生徒が、病弱教育部門には小学部、中学部の児童生徒がそれぞれ在籍している。

(2) 病弱教育部門について

本部門の児童生徒数は、小学部3名、中学部7名の計10名である。全ての児童生徒が心身症と診断されており、症状として睡眠障害、心因性弱視、反復性腹痛などが現れている。また、ADHD、自閉症スペクトラム障害の診断を受けている児童生徒もいる。本校の児童生徒は、半年から4年程度の不登校を経験しており、不登校の理由としては、友人や担任の言動に傷ついたことや、周りの視線が怖くて教室に入れなかったことなどが挙げられる。入学・転学してきたときの児童生徒の症状は様々で、立てなくなる、頭痛や腹痛になる、外出ができなくなるなどといった様子が見られた。また、集団生活の経験が少なく、人間関係の失敗から他者との関係を作ることには不安を抱えていたり、苦手さを感じていたりしていた。このような児童生徒の多くは、これまでの経験から自尊感情が低く、不安を感じながら日々の生活を送っている。保護者も長い間子どもの不登校に向き合い、悩みや不安を抱えた日々を過ごしており、学校への不信感を抱いて本校へ入学・転学している。保護者自身が精神的に不安定になることもあり、保護者も支えながら教育活動を行っていくことが必要である。

本校は通学制であるため、児童生徒はスクールバスや保護者の送迎で登校している。本人の体調や心の状態、家庭などの環境の変化に大きく影響され、登校できなくなることもある。登校が安定していた児童生徒でも状態が悪くなることがしばしばあり、その都度状況に応じて柔軟に対応していくことが求められている。

2 C o - M a M e（連続性のある多相的多階層支援）について

本部門では、国立特別支援教育総合研究所の研究成果であるC o - M a M eを使用して、昨年度より研究を進めてきた。C o - M a M eは、精神疾患及び心身症のある児童生徒への教育的支援・配慮について調査研究を行ってまとめられた支援方法である。「こころの病気」のある児童生徒について複数の教職員で実態把握を行い、支援方法を協議し、共通理解のもとに支援をすることができる。また、「受容期」「試行期」「安定期」と3つの段階が示されており、児童生徒の状態に合わせて支援・配慮を変化・

発展することができる。本部門では、全ての児童生徒に対してC o -M a M e が示す40項目の内容をグループで協議し、実態把握を通じて児童生徒がどの段階にあり、現在の課題とそれに応じた支援には何が必要か、今後どのような支援が必要になるかなどについて協議を重ねた。協議結果を部門内で共通理解し支援に生かすとともに、年度末には再評価を行い、次年度の引継ぎ資料とした。自立活動の個別の指導計画の作成にあたっては、行動観察や諸検査の資料とともにC o -M a M e で得た情報を活用して実態の整理を行い、その内容を児童生徒の中心課題や指導目標の設定に生かしていった。

3 病弱教育部門の自立活動について

自立活動の指導では、下記の側面から指導計画を作成し、指導を行っている。

- ①個々の児童生徒の実態を自立活動6区分から把握する。
- ②予想される進路や将来像を考慮し、必要な課題を明確にする。
- ③課題間の関連を検討し、指導すべき中心課題を明確にした指導計画を作成する。

実際の指導に当たっては、

- ①卒業後の社会参加を目指し、小さな集団から大きな集団へとスモールステップで活動を広げる。
- ②自尊心を高めるために成功経験を積んで、自信を付ける。
- ③自分の得手不得手を知り、自己理解を深めることを通して、身に付けるべき必要な力を意識して取り組むことができるようにする。

以上の3点を重視して、週1時間の自立活動の授業を設定している。個々の児童生徒の課題に応じて、集団や個別で学習しており、集団指導では、共通課題のある少人数グループを作成し、児童生徒の課題に応じたソーシャルスキルトレーニングなどを行っている。主に、他者との関わり方や自分の気持ちのコントロールの仕方、自分の気持ちの適切な伝え方などを設定した。また、個別指導では、認知機能の力（みる・きく・想像する）に苦手さを感じている児童生徒が多いため、5～10分程度の時間で年間を通して設定し、コグトレなど認知機能トレーニングを行った。

4 実践

（1）生徒の実態（中学部男子）

本生徒は、心身症と診断されており、約1年間の不登校を経て本校に入学した生徒である。小学校では、周囲の状況を判断して行動したり、他人の気持ちを考えて発言したりすることが苦手であったため、同年代の友達と適切に関わるができなかった。それが原因で友達とトラブルになっていたようだが、本人はトラブルになっていることを2～3年間、周囲に伝えられずにいた。

WISC-Ⅳの下位検査の結果からは、

- ・4つの指標得点では、VCIの指数が低く、言葉の理解力が低いといえる。分からない時は、すぐに諦めてしまうことが多く、じっくりと考えることが苦手である。
- ・VCIとWMIに弱さが見られ、状況を説明したり、話したい内容を整理し適切に表現したりすることに困難さを感じていることが推測される。という課題が挙げられている。

本校に入学した当初は、

- ・聞くことが苦手なため、視覚的な支援がないと授業内容の理解が難しい。
- ・注意すべき箇所が分からないため、授業中に大切なことを聞き逃してしまう。
- ・語彙が少ないため、自分の細かい心情の変化を伝えることができない。

- ・自己理解が難しいため、自分の得手不得手が分からず、周りの人に言われたことで自分の得手不得手を判断している。などの課題が見られた。

(2) C o - M a M e の取組

これらの実態を踏まえ、担任を含む3名の職員で、C o - M a M e の「精神疾患・心身症（こころの病気）のある児童生徒の教育的ニーズ アセスメントシート」を用いて40項目のチェックを行った。その後、部門内で共通理解を図り、支援方法を協議した。協議の結果、以下の3項目に重点を置いて支援・配慮を行うこととした。

項 目	課 題	支援方法
【A5】 自己理解 (受容期)	・自分の得手不得手や好き嫌いが分からない。	・自己理解チェックを行い、自分の得手不得手を知ることができるようにする。
【A6】 気持ちの表現 (受容期)	・気持ちを表す語彙がとても少ない。 ・気持ちを伝えられずに暴言を吐くことがある。	・感情を表す言葉の表を作成し、様々な表現を使って文章を書けるようにする。
【C3】 聞き取り・理解力 (試行期)	・知らない言葉が多いため、話の内容や授業の内容が理解できないことが多い。	・分かりやすい言葉で伝えるようにする。

(3) 自立活動の指導目標・内容の設定

ア 実態把握

まず、自立活動の個別の指導計画作成の手順に基づき、6区分に即した実態把握を行った。その際、C o - M a M e の6領域40項目との関連事項も検討し記載した。本生徒は将来高校に進学することを希望しており、3年後は現在よりも大きな集団で学習や活動することが想定される。そのため、以下に示す力を付けることが必要と考えた。

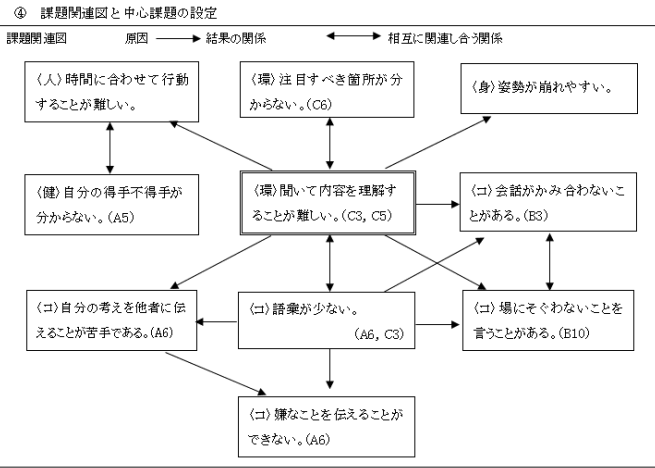
- ①聞く力を高めることで、授業や集団活動の中でできることを増やす。
- ②ソーシャルスキルを高めることで、自分の気持ちを相手に言葉で適切に伝えられるようになる。
- ③成功経験を重ねることで、言葉で伝える意欲を高める。

イ 中心課題の設定

実態把握を踏まえ、課題の抽出を行い、課題関連図と中心課題の設定を行った。

③ 課題の抽出 () 内の記載番号はC o - M a M e の項目番号					
健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
・体調の調整が苦手である。 ※5 ・自分の得手不得手が分からない。(A5)	・注意が集中しにくい。 ※5 ・学校では今のところ情緒が安定している。(A7) ※1 ・心配なことがある。(C8) ※5 ・不安を感じる。(D4) ※4	・相手の気持ちを理解することが難しい。(B3) ※3 ・先験が分からない。(B3) ※3 ・好きなものがすぐに忘れてしまう。(C4) ※2 ・時間に合わせて行動することが難しい。 ・関係せずに集団参加することができない。(B4) ※1	・注目すべき箇所が分からない。(C5) ※5 ・姿勢を維持することが難しい。(C6) ※5 ・読み聞かせや読み聞かせが苦手である。(C6) ※5 ・書きに苦手さがある。(C4) ※2 ・大きな音が苦手である。(C6) ※4 ・開いて内容を理解することが難しい。(C3, C5)	・姿勢が崩れやすい。 ・鉛筆の握り方がおかしい。(C6) ※5 ・手先を使った作業が苦手である。(C6) ※5 ・整理整頓が苦手である。(B3) ※5	・自分の考えを他者に伝えることが苦手である。(A5) ・場にとぐわいことを言うことが苦手である。(B10) ・通訳することが苦手である。(A9-C8) ※3 ・会話がかみ合わないことがある。(B3) ・嫌なことを伝えることができない。(A5) ・言葉が少ない。(A5, C3)
※除外理由 1 今すぐでいいこと、長所や好きなこと 2 教科学習で扱う課題 3 現段階では解決が困難な課題 4 障害特性を示すものであって、配慮で対応する課題 5 自立活動の時間での指導だけでは難しい課題 6 現状維持を目指す課題や数年間指導しても習得できなかった課題 7 3年後(卒業後)に目指す姿と関係が弱い課題					

(自立活動指導計画より一部抜粋)



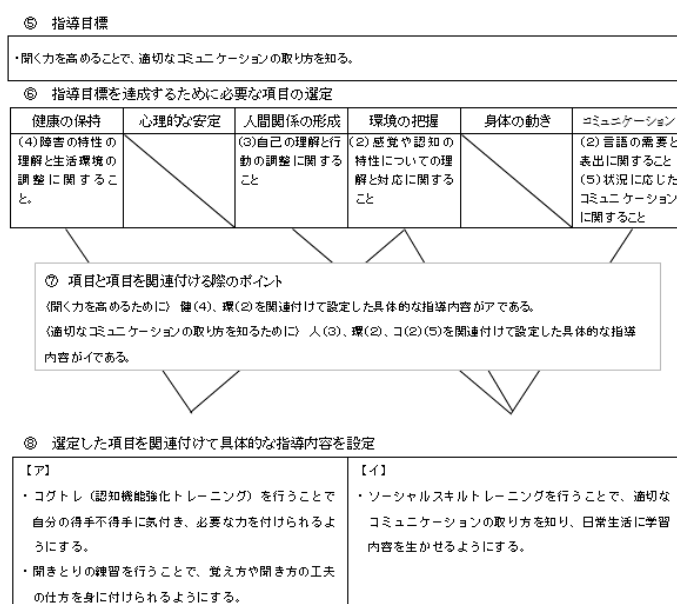
生徒の実態や学習上又は生活上の困難やこれまでの学習状況を整理し、3年後の姿を想定した上で【〈環境の把握〉聞いて内容を理解することが難しい】を本生徒の中心課題と捉えた。そして、

- ・聞く力を高めることで、学習面や生活面において理解が高まり、個別の支援なしでもできることが増えるのではないかな。
- ・会話を中心としたソーシャルスキルトレーニングを行うことで、自分の気持ちを相手に言葉で適切に伝えられるようになり、コミュニケーション能力が高まるのではないかな。また、その成功経験を重ねることで、伝える意欲を高めることができるのではないかな。と指導仮説を考えた。

ウ 指導目標、指導内容の設定

中心課題を踏まえ、本年度の自立活動の指導目標を「聞く力を高めることで、適切なコミュニケーションの取り方を知る。」とした。具体的な指導内容として以下の2つを設定した。

- (ア) ・コグトレを行うことで自分の得手不得手に気づき、必要な力を付けられるようにする。
- ・聞き取りの練習を行うことで、覚え方や聞き方の工夫の仕方を身に付けられるようにする。
- (イ) ・ソーシャルスキルトレーニングを行うことで、適切なコミュニケーションの取り方を知り、日常生活に学習内容を生かせるようにする。



(4) コグトレの取組

上に2つの指導内容を挙げたが、ここでは(ア)の取組について紹介する。

ア 実施方法

「覚える」「数える」「写す」「見つける」「想像する」の5分野の課題を週替わりで行い、自分の得手不得手を見つけてことから始めた。5分野の課題に取り組んだ後、自分の点数を集計し、表にすることで自分の得手不得手を意識して取り組めるようにした。本生徒については、聞くことの苦手さがあったため、「覚える」の課題を通じて、聴覚的注意の集中・持続、及び聴覚的短期記憶を高める学習に取り組んだ。

イ 指導の実際

本生徒は、自立活動のオリエンテーションで行った自己理解チェックにおいて聞くことの苦手さを自覚していなかったため、聞くことの苦手さを意識させることから取り組んだ。まず、コグトレの「覚える」の分野から『最初とポン』を行った。本生徒は2つのことを同時に行うことが苦手であるため、文頭の言葉を覚えることと、動物の名前が出たら手を叩くことを同時にすることが難しかった。そのため、C o - M a M e の当初の実態把握では【C 3 聞き取り・理解力】〈試行期〉にしていたが、思ったより聞くことに課題があることが分かったため、〈受容期〉に支援方法を変更することにした。

次に、コグトレや聞き取りトレーニング、メモを取る練習などに取り組んだ。聞き取りトレーニングでは、始めは「たぶん（内容が）難しくなってきたら分からなくなるので（聞くことに）慣れていきたいです。大事なところが（聞き取れなくて）抜けていたので気を付けたいです。」と感想を書いていた。

その後、色々な覚え方を試して自分に合った聞き方を考えたり、メモを取る練習を重ねたりすることで、少しずつ聞き取る時の集中力が高まり、メモを取るコツをつかめるようになった。コグトレの「何が何番？」（右の図）では、声掛けによって少しずつメモを取ることができ、「（メモを取ることが）できました、少し。書きながら覚えるのが難しかったので、これ（聞きながらメモを取ること）を頑張りたいです。」と感想を書くことができた。（下線部が本人の書いた文。）

🔊 何が何番？ ① -1 年 月 日

これから問題を読みます。よく聞いて答えを〔 〕に書きましょう。

1 〔 里 〕

2 〔 あいちゃん 〕

3 〔 ぶらんこ 〕

4 〔 赤服の男 〕

5 〔 二 おおきい 〕

6 〔 こうびんきょく やきょく 〕

Neuro-Cognitive Enhancement Training

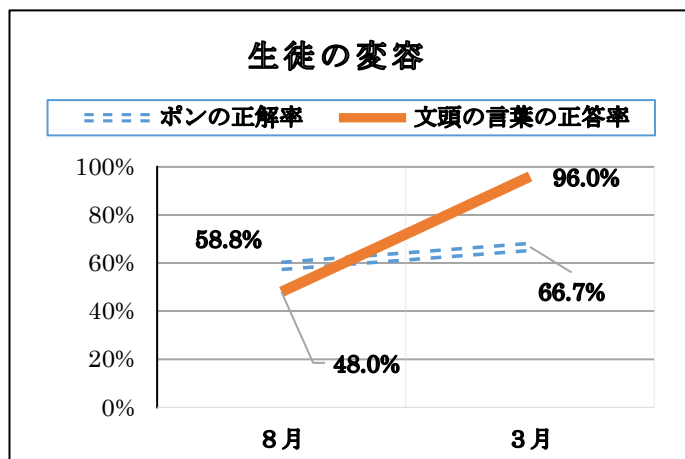
（5）成果と課題

ア 成果

本生徒は、今まで聞くことが苦手という意識はあまりなかったが、コグトレや聞き取りトレーニングに取り組むことで、聞き取ることが苦手だということに気付くことができた。

学習を重ねた後のコグトレでは正答率が上がり、成果が見られた（右の図）。コグトレと並行して行ったソーシャルスキルトレーニングの取組によって、学校生活では、話の内容が分からない時に「もう一度言ってください。」と言えるようになり、以前より適切なコミュニケーションが取れるようになってきている。

分からないことを伝えられるようになったため、本人の困難さを教師も理解し、分かりやすい言葉で伝えるなど支援を工夫している。また、忘れ物をしないようにメモを取るという姿も見られるようになった。



イ 課題

今回の取組を通して、「集中力が続かない」「難易度が上がると途中で聞くのを諦めてしまう」という課題が明らかになった。これらの課題の背景には、「聞いて内容を理解することが難しい」という本生徒の中心的な課題が関連しているものと思われる。この課題の改善のためには、今後も聞き取りのトレーニングを継続し、聞く力を高めていくことが重要であると考えます。現在、教科学習では「聞き取りにくさ」という本生徒の困難に対して分かりやすい言葉で伝えるなどの配慮を行っているが、徐々に配慮が軽減できるよう、自立活動の時間の指導や学校生活全般を通して「きちんと聞き取るこ

とができた。」という経験を積み重ねられるようにしていきたい。また、現段階では本人にとって「自立活動の授業での取組」という認識であり、学校生活の一部にしか般化されていないため、学習したことを教科学習や日々の生活での人とのやりとりに般化させていけるようにすることが今後の課題である。

5. 成果と課題

ア 成果

C o - M a M e は、精神疾患及び心身症の児童生徒への対応を背景としているため、本部門の児童生徒にとっても共通した課題が網羅されており、児童生徒の実態を捉えることに役立った。具体的には以下のような成果を得ることができた。

- ・病弱教育部門全員で協議を重ねたことにより、児童生徒の実態と望ましい支援について共通理解を図り、足並みをそろえた支援を行うことができた。その結果、児童生徒の安定した学校生活につながることもできた。
- ・児童生徒の心身の状態はその時々におかれた周囲の状況に応じて変化することが多いため、状態が悪くなってもその都度3つの段階を思い出し、教師側が不安にならずに、その時の状態に合わせた支援・配慮を考え実行することができた。
- ・初めて心身症の児童生徒と関わった教師も、児童生徒がどのようなことに困っているのか、どのような支援・配慮が必要なのかを理解することができた。
- ・本校は、40項目全ての児童生徒を対象に協議したため、本部門全体の児童生徒の実態から必要な支援の差などを明らかにすることができた。

イ 課題

1つ目の課題は、児童生徒の変動に応じた指導目標や内容を設定することである。本部門の児童生徒は環境にも影響されやすく、その時々により心身の状態が大きく変化するため、指導目標を設定しても本人の状態が変化すると指導に生かせないことがあった。C o - M a M e が児童生徒の変容に応じて段階を設定していることを参考にしながら、「学習指導要領解説 自立活動編」P146 病弱の個別の指導計画のように児童生徒の変動に応じた個別の指導計画の作成を検討していきたい。

2つ目の課題は、C o - M a M e を活用したアセスメントを効率的に進めるための手続きの改善である。多くの時間を要することなくアセスメントができるよう、チェック項目を絞ったり、整理用シートを工夫したりしていきたい。

〈参考文献〉

- ・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部） 平成30年3月
- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 「精神疾患及び心身症のある児童生徒の教育的支援・配慮に関する研究（平成29～30年度）」平成31年3月
- ・宮口幸治 「コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング」三輪書店 2015
- ・NPOフトゥーロLD発達相談センターかながわ 「ワーキングメモリーとコミュニケーションの基礎を育てる 聞き取りワークシート③ イメージして聞こう編」かもがわ出版 2015